

1 主題名 感謝 2-(5)

2 資料名 おばあちゃんのアルバム (自作資料)

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

内容項目2-(5)は「日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。」である。「小学校学習指導要領解説 道徳編 平成20年8月 文部科学省」では、小学校高学年の段階においては、感謝の対象を人のみならず日々の生活そのものにまで広げることの大切さを強調している。そうした中で、あらゆるものへの感謝の気持ちを持ち、その気持ちを表すことで、潤いのある人間関係が築かれることを自覚することが大切である。人は誰も、目の前の問題や欲求にとらわれ、自分を支えてくれるものに感謝の気持ちを感じ、それを表すことを忘れがちである。したがって、時にはふと周りを見渡し、自分の日常があらゆる人やものに支えられていると感じ取り、それらに感謝の気持ちを表すことが大切である。この内容項目は、人々が、日々の暮らしの中で自分を支えてくれるもの全てに思いをはせ、それらに感謝の気持ちを持ち、それにこたえようとする心をはぐくむものである。

(2) 児童の実態について

実態調査から、学級の大半の児童については、感謝の気持ちに関する心情・判断力・実践意欲がはぐくまれていると判断できる。ただし、行為についての質問『いつも「ありがとう」の言葉が素直に言える。』に対しては、「だいたいは言える」という回答がほとんどである。その理由は「知らない人には、ちょっと言えないかもしれない。」「たまに素直になれない時がある。」「忘れてしまうことがある。」などであり、心ははぐくまれているが、行為として表出するには課題があり、いつ、誰に対しても感謝の気持ちを表せるわけではないという実態が見て取れる。特に「言えないことの方が多い。」と回答した児童への指導が必要である。

☆感謝の気持ちに関する実態調査<平成23年10月14日実施；第5学年3組31人>

質 問	回 答		
「ありがとう」という言葉って、いいなと思う。	とてもそう思う。	25人	言われたらうれしいから、等。
	どちらかといえばそう思う。	5人	ありがとうは素敵だから、等。
	あまりそう思わない。	1人	気持ちよくなるから、等。
	全くそう思わない。	0人	
「ありがとう」の言葉を、口に出して言うことは大切だ。	とてもそう思う。	21人	相手もうれしくなるから、等。
	どちらかといえばそう思う。	10人	もっと仲よくなれるから、等。
	あまりそう思わない。	0人	
	全くそう思わない。	0人	
「ありがとう」とできるだけ言うように心がけている。	いつも心がけている。	11人	大事な言葉だから、等。
	なるべく心がけている。	19人	たまにわすれてしまう、等。
	あまり心がけていない。	1人	そればかり心がけるから。
	全く心がけていない。	0人	
いつも「ありがとう」の言葉が素直に言える。	いつも言える。	9人	言わなきゃ伝わらないから、等。
	だいたいは言える。	20人	知らない人にはちょっと言えないかもしれないから、等。
	言えないことの方が多い。	2人	言おうとしているんだけど言えない、等。
	ほとんど言えない。	0人	

(3) 資料について

本資料は、授業者の自作資料である。主人公の亜紀は、幼い頃はおばあちゃんが大好きだったが、成長と共におばあちゃんを疎ましく思うようになる。そしていつしか、おばあちゃん存在すら意識しなくなるが、亡くなったおばあちゃんが大切にしていたアルバムを目にして、後悔の念と共に自分に深い愛情を注いでくれたおばあちゃんへの感謝を実感する姿を描いている。

授業では、おばあちゃんが大好きだった幼い頃の主人公の気持ちを理解させることで、幼い頃に誰もが感じる祖父母など身近な家族を慕う気持ちを思い起こさせたい。次に、思春期にさしかかって、自分に愛情を注いでくれている人への感謝の気持ちを忘れがちな人間の弱さを感じさせたい。そして、亡くなったおばあちゃんが大切にしていたアルバムを見たときの主人公の気持ちを考えさせることを通して、自分を支えてくれている人や、自分を大切にしてくれる人への接し方がどうであるのかを見つめ直すと共に、今の自分を支えてくれるもの全てに対して、感謝の気持ちを持つことの大切さを考えさせ、ねらいとする価値に迫りたい。

4 本時の指導

(1) ねらい

主人公の心情を理解することを通して、自分を支え、大切にしてくれている人や人々の営みに気づき、それにこたえようとする心情を育てる。

(2) 準備

読み物資料、ワークシート、挿絵、発問カード（掲示用）

(3) 展開

流れ	学習活動と発問	予想される児童の反応	教師の支援
関心をもつ	1 自分が感謝の気持ちを言葉で表した経験を思い起こす。 ○一番最近言った「ありがとう」は、いつ、誰に対してですか。	<ul style="list-style-type: none"> ・昨日、友達にいった。 ・日曜日、宅急便の人にいった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいとする価値にふれ意識付けを図る。
深める	2 読み物資料「おばあちゃんのアルバム」を読み話し合う。 ○おばあちゃんが大好きだったのはどうしてでしょう。 ○「もう二度と、私の部屋に来ないでよね!」といったのはどうしてでしょう。 ◎写真を見続けることができなくなってしまったのはどうしてでしょう。	<ul style="list-style-type: none"> ・優しくしてくれるから。 ・何でも知っているから。 ・一緒にいてくれるから。 ・友達の前で、恥をかいたから。 ・もう、小さい子どもじゃないから。 ・おばあちゃんのしてくれることは、迷惑だから。 ・おばあちゃんの愛情に気が付いたから。 ・おばあちゃんに申し訳ないと思ったから。 ・もう、会えないと思うと後悔の気持ちがわいてきたから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・主人公は、幼い頃、おばあちゃんのが大好きだったことを理解させる。 ・主人公のいらだちを理解させることで、人間の身勝手さや弱さを理解できるようにする。 ・自分の生活を支えてくれる人々に対して、感謝の気持ちをもつことの大切さを自覚させるようにする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>☆期待する姿が見られなかった場合の指導 涙が出るのは、どのような気持ちの表れかを考えさせることで、価値に迫れるようにする。</p> </div>
見つめる	3 授業を振り返り、感じたことを話し合う。 ○今までに、ありがとうの言葉を伝えられた経験や伝えられなかった経験を思い出し、その時の気持ちを話し合おう。また、自分を支えてくれる人への思いを考えて見よう。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分を支えてくれる人に、感謝の気持ちを十分に表せていないので、これからは、それを表せる人になりたいと思う。 ・感謝の気持ちを言葉に出すのは、恥ずかしかったけれど、いい気持ちになった。 ・感謝の気持ちは大切だ。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎自分を支え、大切にしてくれている人や人々の営みに気づき、それにこたえようとする心情が育ったか。（ワークシート、発表、観察）
つなぐ	4 教師の説話を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・全員静かに、教師の説話を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・感謝の気持ちを伝えることの大切さやよさを考えられるようにする。

おばあちゃんのアルバム

私は、小さい頃はおばあちゃん子で、よく、おばあちゃんに手を引かれてお散歩に行ったり、一緒にお風呂に入ったりしていました。いつもやさしくて、楽しいお話を聞かせてくれて、小さい私が悩み事を抱えていても魔法のように解決してくれるおばあちゃん。私は、そんなおばあちゃんが好きでした。

でも、私が小学校の五年生くらいになると、おばあちゃんの世話好きが、逆に、面倒に思えるようになってきたのです。例えば、寒くなると、私がかぜをひかないようにと部屋着を縫ってくれました。でも部屋着は、どう見ても古くさく、時代遅れで一度も着ませんでした。ある時は、友達が私の家へ遊びに来たのを知って、おばあちゃんが部屋におやつを持って来たのです。でも、羊羹や飴など、お年寄りが好むような味のものばかりで、小学生の女の子が食べたがるようなおやつは、ひとつもありませんでした。私は部屋の入り口で「おばあちゃん、いいよ！こんなの持ってかえてよ。」と小声で言いましたが、おばあちゃんは私が遠慮しているんだと思って「亜紀がいつもお世話になっているお友達だろう？ちゃんとごあいさつしておかなくちゃねえ。」と言って、部屋に入ってきてしまいました。「おやおや、いつも、亜紀がお世話になっちゃって……。今日は美味しいものをもってきましたからね。遠慮しないで、たくさん食べて下さいねえ。」とみんなに言ったのです。友達は、別に、私やおばあちゃんをばかにするようなことは言いませんでしたが、私は、恥ずかしさでいっぱいになりました。そして、友達が帰った後、おばあちゃんに怒りをぶつけたのです。

「もう、おばあちゃん！いい加減にしてよ、あんな、年寄りが食べるもの持ってきて！私たちに食

べさせたかったら、友達のお家みたいに、ケーキとか紅茶とか、おしゃれなものをもってきてよ。恥ずかしいじゃない。もう二度と、私の部屋に来ないでよね！」

そう言っておばあちゃんの部屋を飛び出しました。今にして思えば、おばあちゃんは、とても悲しそうな顔をしていたような気がします。でも、その時の私には分かりませんでした。

おばあちゃんが寝たきりになったのは、その年の秋のことでした。お風呂も、食事も、トイレも、お父さんやお母さんの世話にならなければ、自分ではできなくなりました。その頃、私は、友達と遊ぶことや習い事に忙しく、おばあちゃんの世話は、何一つ手伝いませんでした。心配だな、という気持ちは少しありましたが、正直、面倒くさいな、いつも寝たきりのおばあちゃんの部屋は変な臭いにするから近寄りたくないな、と思っていました。だいたい、お父さんやお母さんがお世話をしているんだから、子供の私は何もしなくてもいいだろう、という気持ちもありました。でも、本当の事を言えば、その時の私は、おばあちゃんのことなんて忘れていたのです。

あの日は、学校に行こうとする私を、お父さんが呼び止め「今日は、ばあちゃんの顔、見てけよ。」と言いました。私がおばあちゃんの寝ている部屋の障子をスツと開け、横になっているおばあちゃんの方を見ると、いつもは目をつぶっているおばあちゃんが目を開けて、私を見ていました。「おばあちゃん、行ってくるから。」と私が言うと、おばあちゃんは、意外にはつきりした声で「今まで、お世話になったけど・・・もう、おしまいだよお。」と私に言いました。それが、大好きだったおばあちゃんと私が交わした最後の言葉でした。学校から帰った私を迎えたのは、白い服に着替えさせら

れ、小さくて、冷たくなったおばあちゃんの亡骸なきがらでした。その時、ああ、もうおばあちゃんは帰ってこないんだな、そのうちやろうと思っていたお世話も、もう二度と出来ないんだな、と分かりました。

ふと気付くと、冷たくなったおばあちゃんの枕元まくらもとに、一冊さつのアルバムがおいてありました。思わず手に取った私は、一枚まい、二枚とページをめくるごとに涙なみだがあふれ、写真を見続けることが出来なくなってしまうました。そのアルバムは、おばあちゃんと私だけのアルバムだったのです。そこにとじられている写真はすべて、私の写真か、おばあちゃんと私の二人で撮とった写真だったのです。おばあちゃんに抱だっこされたり、手を引かれて歩く、幼おさない私の姿すがた。赤ちゃんの服を着て、眠ねむる私の顔。そのアルバムの一枚いちまい一枚に、おばあちゃんの手書きで書かれたその写真のエピソード。私がどんなに、おばあちゃんに愛されて育ったのかが、今更いまさらながら、わかりました。私がおばあちゃんにしてきた失礼なことの数々、自分のことばかりを考えて、育ててもらったおばあちゃんへの恩返おんがえしをすっかり忘れてしまったこと……。

今、私は、おばあちゃんが寝ていたベットを見ながら、この作文を書いています。おばあちゃんがいなくなったベットは、主あるじを失い、忘わすれ去さられたように、部屋の片隅かたすみに置いてあります。願いがかなうならば、もう一度、おばあちゃんに会いたい。会って言いたい。おばあちゃん、ごめんね、そしてありがとう、と。





